

『禪定灯明論』漸門派章における 「浄居天子会」の引用について

宮 崎 泉

はじめに

ヌブチェン・サンゲーイエシエー (gNubs chen sañs rgyas ye śes) の著作とされる『禪定灯明論』(bSam gtan mig sgron) は、テキストが一本¹⁾しか現存しない上、テキスト自体に混乱があり、多くの問題が残るテキストである。また、『禪定灯明論』には割注が付されているが、割注も難解で不明な点が多く、いつ誰の手によるものかも知られていない。

割注は概して語注や補足程度の短いものであるが、『禪定灯明論』漸門派章²⁾に引用される「浄居天子会」には異例に長い割注が付される。そのため、それを考察することによって、割注の特徴や問題点を考えることが可能になる。本稿では『禪定灯明論』漸門派章の「浄居天子会」の引用・割注と「浄居天子会」そのものを比較しながら、割注について考えてみたい。あわせて『禪定灯明論』のテキスト混乱の状況についても明らかにする。

本稿ではまずこれまでの研究を参考に「浄居天子会」そのものを概観した上で、『禪定灯明論』漸門派章に引用される「浄居天子会」から問題のある箇所を取り上げ考察する。

1 「浄居天子会」について

「浄居天子会」³⁾は『大宝積經』(蔵訳は「宝積部」)に含まれ、漢訳と蔵訳が現存する。漢訳は「浄居天子会」となっているが、蔵訳は「夢説示」(Svapnanirdeśa, rMi lam bstan pa) という経名を持ち、その名の通り、夢を主題とする⁴⁾。ここで扱われる夢は「夢中見仏」等ではなく、「夢相」(rmi lam gyi mtshan ma) であり、夢相を十地と関連させて説明することにこの経典の特徴がある。

「浄居天子会」は序分、流通分を備え、一般的な経典の体裁をとるが、それ以外はすべて夢相の説明に終始する。「浄居天子会」は蔵訳・漢訳ともに 108 の夢

(18) 『禅定灯明論』漸門派章における「浄居天子会」の引用について (宮 崎)

相があることを明示する。そして 108 の夢相の項目だけをまず列挙し⁵⁾、次に一つ一つの夢相を十地と関連させながら説明するという形をとる。本稿では、便宜上 108 の項目を列挙する箇所を「項目部」、一つ一つの夢相を説明する箇所を「説明部」と呼ぶ。

ところで、ここで言及しておかなければならないことに漢訳の不備がある。漢訳は竺法護訳として残るが、あまりよい訳ではなく、特に説明部に明らかな不備が見られる。これは既に指摘されていることではあるが⁶⁾、参考のために説明部の蔵訳と漢訳の異同を表にまとめた。

蔵訳	1-2	3-16	17	18-44	45	46-57	58	59-108
漢訳	×	○	×	○	(○)	○	(○)	○

表中×は漢訳が欠けている箇所を、(○)は漢訳が存在するけれども前の項目とつながってしまい、意味が不明瞭になっている箇所を示している。この表から明らかな通り、漢訳は一部の項目を欠くのをはじめ体裁の点でも問題があるのであるが、蔵訳と比較すると翻訳の点でも問題が多い。そのため、本稿では主に「浄居天子会」の蔵訳と比較しながら論を進めることにしたい。

2 『禅定灯明論』における「浄居天子会」の引用

『禅定灯明論』漸門派章では、止観などの修習が説かれた後「浄居天子会」が引用される。その引用の前には次のように説かれている。

浄化の因時には夢相 (rmi ltas kyi mtshan ma) も生じるが、それでもおごるべきではない。
また『宝積経』に 108 の夢が説かれている。(『禅定灯明論』83.6)

この一文によって修習における 108 夢相の位置は明らかであろう。また、あわせて『禅定灯明論』も夢が 108 個あることを知っていたことも知られる。

これに続いて『禅定灯明論』は「浄居天子会」の項目部を引用し、108 個の夢相を挙げる。この引用は他の引用と比べても例外的に長く、そして、その一つ一つの夢相にまた異例に長い割注が付されている。その割注を「浄居天子会」と比較すると、割注は夢相の項目に対応する説明部を引用するような形になっていることが分かる。ただし、表現はかなり簡略になる。具体的な例は後述しよう。

このように『禅定灯明論』本文にある引用は基本的に「浄居天子会」項目部と対応するが、一部一致しない所もある。両者の異同を一覧にすると次のようになる。

『禪定灯明論』	1-19	20	21-24	25	26-66	×	67-85	×	86-108
「浄居天子会」	1-19	×	20-23	×	24-64	65	66-84	85	86-108

『禪定灯明論』本文には108という数が明示され、引用にも108個の夢相があることから、数の点では問題はない。しかし、『禪定灯明論』にある20、25は「浄居天子会」に対応する項目がなく、一方「浄居天子会」にあった65と85は欠けていることが分かる。言い換えれば、「浄居天子会」の二つの項目が欠けた代わりに、『禪定灯明論』では新たに二つの項目が付け加わっていることになる。これによって108という数字を変えないよう細工しているわけである。これがどのように付け加わったのか、割注もあわせて考えてみたい。

結論から言えば、付け加わった二つの夢相は「浄居天子会」説明部にある別の夢相に対する説明の一部である。既に述べた通り、他の部分では『禪定灯明論』は「浄居天子会」項目部を引用し、割注は「浄居天子会」説明部を利用するという形になっている。そのため、「浄居天子会」説明部の一部が『禪定灯明論』の本文になっていることから、本来割注であったものが本文に混入しているのではないかと想定することが出来るのである。

紙幅の都合上、問題のある項目全てを検討することは出来ないため、「浄居天子会」に対応のない二つの夢相のうち『禪定灯明論』20を取り上げてそれを確認していきたい。

3 『禪定灯明論』20 について

3.1 『禪定灯明論』本文と割注

まず『禪定灯明論』20の本文と割注がどうなっているかを、その前後も含めてみてみよう。

19. 如来身であるという夢を見ることと

〔割注〕初地から十地までであると見るべきである。陀羅尼と三昧と神通力を完成することができ、如来に護念される。（『禪定灯明論』88.6）

20. 立っている如来身に施しを与えることを見ることと

〔割注〕初地であるとするべきである。座している〔如来〕に与えることを見るならば、二地である。莊嚴された〔如来〕に与える者は三地である。眷属に囲まれた〔如来〕に与えるならば⁷⁾五地である。両方の人々に囲まれている〔如来〕に与える者は六地である。全ての莊嚴の中で瞑想する〔如来〕に与える者は七地である。説〔法〕を行う〔如来〕⁸⁾に与える者は八地である。神通を行う〔如来〕に与える者は九地である。

(20) 『禪定灯明論』漸門派章における「浄居天子会」の引用について (宮 崎)

全てにおいてまた魔業を理解すべきである。) (『禪定灯明論』 89.1-89.3)

21. 夢の中で、仏塔に対して供養を行うこと

(〔割注〕五地のうちいずれかであるとみるべきである。布施を行ったことも覚えているが、その者がおごらないならば、初地と見るべきである。同様に五波羅蜜と五地が対応する。その者は憎悪の心をなくすべきである。) (『禪定灯明論』 89.3)

このうち、21 は問題のない一般的な形である。割注ではまず何地までに対応するかが説明され、その後各地について詳しく説明される。ここでは五波羅蜜と対応すると略して説かれている。

それに対し、19 の割注を 21 の割注と比べると、19 の割注は十地と関連させた具体的な記述が欠けており、その部分が欠落しているように見える。また、20 では、割注が「初地であるとするべきである」と唐突に始まっていたり、四地が説明されていなかったりといった問題もある。

これらの問題点については「浄居天子会」説明部との比較の中で明らかにしていきたい。

3.2 「浄居天子会」項目部

次に、この『禪定灯明論』の引用に対応する「浄居天子会」項目部を挙げてみよう。

19. あるいはまた自らが如来身であると知ることと (D.205b1,P.235a5. cf. T.81b12-13)

20. あるいはまた自身が如来の塔に花・花鬘・香・香油を与えて塗ると知ることと (D.205b1-2, P.235a5-6. cf. T.81b13)

これを『禪定灯明論』と比較すると、『禪定灯明論』19 が「浄居天子会」19 に対応し、『禪定灯明論』21 が「浄居天子会」20 に対応することが分かる。『禪定灯明論』21 は表現が異なっているため、対応がやや分かりにくくなっているが、『禪定灯明論』の割注と「浄居天子会」の説明部を比較すると、対応していることがよりはっきりする。このような表現の違いは他の項目でも頻繁に見られるものである。

さて、ここで問題となるのは『禪定灯明論』20 で、これに対応するものが「浄居天子会」には見当たらない。では『禪定灯明論』20 は何であるのか、それを次に見ていきたい。

3.3 「浄居天子会」説明部

前述の通り、「浄居天子会」では、項目部において今見たような夢相の項目が

108 個挙げられた後、説明部において個々の夢相の項目に対する説明が 108 個続くという形になっている。次に挙げるのはその中の「あるいはまた自らが如来身であると知ること」という 19 番目の夢相に対する説明部である。

19. 金剛摧よ、あるいはまた、菩薩が夢の中で自身が如来身であると知るならば、その菩薩は初地であると知るべきである。また、九地までであるとも知るべきである。その菩薩は陀羅尼を完成することができ、三昧を完成することもでき、神通力を完成することもできる。その菩薩を仏も護念するので、その者も心を平等にすべきである。それによって速やかに悟りが成就し、正等覚もするであろう。（D.210b5-7, P.241a3-5. cf. T.82c24-27）

立っている如来に施しを与えることを見るならば、その菩薩は初地であると見るべきである。座している〔如来〕に与える者は二地であると見るべきである。莊嚴を備えた〔如来〕に与える者は三地である。眷属に囲まれている〔如来〕に与える者は四地である。多くの人に囲まれている〔如来〕に与える者は五地である。両方の人々（眷属と多くの人々⁹⁾）に囲まれている〔如来〕に与える者は六地である。全ての莊嚴の中で瞑想する〔如来〕に与える者は七地である。称賛する〔如来〕に与える者は八地である。神通を行う〔如来〕に与える者は九地である。全てにおいてまた魔業を理解すべきである。（D.210b7-211a3, P.241a5-b1. cf. T.82c27-83a5）

ここでは説明の都合上二つの段落に分割しているが、これは典型的な説明部の形式である。説明部では、まず項目部の内容に準ずるものを再掲し、それが何地から何地まで対応するか、あるいはどういう意味を持つかを示し、その後、項目をより具体化させた夢相がどの地に対応するかが説明される。

この「淨居天子会」の説明部 19 を『禪定燈明論』の 19, 20 と比較してすぐに気付くことは、この説明部の二重下線部が『禪定燈明論』20 の本文と対応していることである。これによって、前述の通り、『禪定燈明論』20 の本文は、本来割注であり、続く割注と連続していたのではないかと考えることが出来る。「淨居天子会」では上に挙げた箇所は全て 19 番目の夢相に対する説明部であり、他の項目では『禪定燈明論』割注は「淨居天子会」説明部を使って注釈していたからである。また、『禪定燈明論』20 の割注は、唐突に「初地であると見るべきである」と始まり、どういう場合に初地であるかということが示されていなかったが、初地の場合の条件が本文になってしまっているため、その条件が欠けてしまったと考えられよう。

次に、「淨居天子会」説明部の前半を『禪定燈明論』19 と比べてみると、極め

て簡略になってはいるが、ほぼ対応していることが分かる。「浄居天子会」で九地までとなっているものが『禪定灯明論』で十地までとなっているのは、割注の一部が本文になってしまい、結果として後に続くはずの具体的な地に関する説明が欠けてしまったため、誤りが紛れ込みやすくなったのではないかと想像できる。また、『禪定灯明論』19には十地と関連した具体的な説明が欠落していたが、本来この項目についての説明であったものが別の項目として扱われてしまったために、具体的な説明が欠けることになる。

後半は、『禪定灯明論』20の本文とその割注に対応するわけであるが、これも表現が簡略になっているものの、よく一致する。『禪定灯明論』20の割注に四地に対する説明が欠けてる点が相違するが、「浄居天子会」説明部と比較すると、欠落しているのは四地と五地の間の部分であることが分かる。また『禪定灯明論』の八地の説明にある「ston pa」は、「浄居天子会」では「bstod pa」となっており、漢訳も参照すると¹⁰⁾ 本来「bstod pa」であったのではないかということも指摘できよう。これらの相異点には下線を引いて示した。

紙幅の都合上省略するが、『禪定灯明論』25でも同じことが起こっており、「浄居天子会」説明部の一部が『禪定灯明論』本文として扱われ夢相の一項目になっているため、それも本来割注であったのではないかと考えることが出来る。

むすび

以上のように、『禪定灯明論』に引用される108夢相は「浄居天子会」項目部からの引用であり、それに対して割注は「浄居天子会」説明部を使って注釈していた。そして「浄居天子会」に存在しない『禪定灯明論』の二つの夢相は、「浄居天子会」では別の夢相の説明部の一部であった。このことから、その二つの夢相は本来割注であったものが本文に混入したものと考えることが出来る。おそらく108と明示されている夢相のうち二つが失われてしまったために、それを補うためにこのような操作が行われたのであろう。

『禪定灯明論』は誤りが多いにも関わらずテキストが一本しか存在しないため、このような誤りを明らかにすることは難しく、その典拠を探し比較することが最善の方法になる。

また、『禪定灯明論』の割注と「浄居天子会」説明部を比較してみると、割注は非常に簡略化された形になっていることが分かる。そのため割注だけでは理解が難しいものも多く、この点でも典拠を確定することが求められる。しかし現時

点では他の割注の典拠はほとんど不明であり、さらなる研究が必要である。

また、『禪定灯明論』は漸門派章の内容をカマラシーラの説とするが、この「浄居天子会」の夢相の引用とカマラシーラ説との関係は全く不明であり、本稿では扱うことが出来なかった。この点についても今後の課題になる。

-
- 1) *rNal 'byor mig gi bsam gtan or bSam gtan mig sgron: A treatise on bhāvana and dhyāna and the relationships between the various approaches to Buddhist contemplative practice by gNubs chen Saṅs rgyas ye śes*, Leh, 1974.
 - 2) 『禪定灯明論』漸門派章とカマラシーラ説との関係や問題点については以下の拙稿を参照されたい。拙稿『『禪定灯明論』漸門派章について』、『日本西藏学会々報』48, 2002, pp.43-50. 拙稿『The Gradualist Chapter of the *bSam gtan mig sgron* and the Teaching of Kamalaśīla』、『印仏研』52-2, 2004, pp.(53)-(56).
 - 3) [蔵訳] *rMi lam bstan pa (Svapnanirdeśa)*. D.(48), dkon brtsegs, ka, 203b1-237a7, P. [22](760), dkon brtsegs, ka, 233a2-270b4. [漢訳]『大宝積經』浄居天子会, T.[11](310), 80c12-91b28.
 - 4) 「浄居天子会」については以下の論文を参照。光川豊藝「『夢』と菩薩の行一特に宝積經浄居天子会を中心に」、『龍谷紀要』4-1, 1982, pp.121-147.
 - 5) 光川前掲論文は漢訳の項目部に 107 の項目しかないとするが、具体的にどの項目が欠けているか述べられていない。そのためここで具体的に論じることが出来ないが、筆者が数えた所では漢訳の項目部にも 108 項目あったことを指摘しておきたい。（光川前掲論文, p.125）
 - 6) 漢訳の不備については、光川前掲論文, pp.125-130 参照。
 - 7) 四地を欠く。割注の問題点については後述する。
 - 8) 『禪定灯明論』割注には *ston pa mdzad pa* とあるが、「浄居天子会」説明部は *bstod pa mdzad pa* である。この点についても後述する。
 - 9) 漢訳による。T.83a2. 若與自眷屬及與多人共與。是說六住地。
 - 10) T.83a3-4. 若稱讚與。是說八住地。

〈キーワード〉 gNubs chen Saṅs rgyas ye śes, *bSam gtan mig sgron*, *Svapnanirdeśa*, 108 夢相
(京都大学講師、文博)

vow's power.

194. *Vastuprativikalpavijñāna* in the *Laṅkāvatāra-sūtra*

Yu-shik CHUNG

The term *vastuprativikalpavijñāna* used in the *Laṅkāvatārasūtra* has so far been regarded as the *manovijñāna* or seven *pravṛttivijñānas* etc. However, it can be concluded from my investigation of the characteristics of its relevant terms as described in the *Laṅkāvatārasūtra* and the 『顯揚聖教論』 that the *vastuprativikalpavijñāna* is therein given almost the same characteristics as those of the *ālayavijñāna*.

195. On the Six Characteristics in the *Ārya-daśabhūmi-vyākhyāna* (ADV)

Kyung-nam KIM

The Six Characteristics (六相) generally have been positioned as the basis of the “Interfusion of the Six Characteristics” (六相円融) from the Huayan (華嚴) school’s standpoint, but not much study has been done on the Six Characteristics in the ADV itself. The purpose of this paper is to clarify the meaning of the Six Characteristics in the ADV, specifically focusing on the transfiguration of an equivalent and the context of the Six Characteristics.

In conclusion, we can find that the Six Characteristics, used as the method of annotation in the ADV, are more embodied in a comparison of the *Daśabhūmika-sūtra* (十地經). Also, it is noted that transfiguration of the Six Characteristics is shown more clearly in the Tibetan version of ADV than in the Chinese version.

196. On the Citation of the *Svapnanirdeśa* in the *bSam gtan mig sgron*

Izumi MIYAZAKI

The Gradualist chapter of the *bSam gtan mig sgron* (SMG), ascribed to gNubs chen Saṅs rgyas ye śes, cites from the *Svapnanirdeśa* (*Svap*), a part of

the *Ratnakūṭa*, 108 dreams indicating progress in spiritual practice. They are annotated with exceptionally long interlinear commentaries. Among them, two dreams of the *Svap* seem to be missing, while two unknown ones are apparently added.

Comparing the citation with the *Svap* itself, this article describes the characteristics of the interlinear commentaries and the text corruptions of the *SMG*, which are often difficult to ascertain because the text is only available in a single edition.

The *Svap* first enumerates 108 dreams and later explains them in detail. The *SMG* quotes the enumeration part, while the interlinear commentaries explain the dreams by quoting the explanation part of the *Svap*. But since the two added dreams of the *SMG* are separately found in the explanation part of the *Svap* together with two other dreams, they may be considered to have originally belonged to the interlinear commentaries.

The interlinear commentaries are often so simplified that it is difficult to understand them without their sources. The sources, however, remain unknown for most other parts of the Gradualist chapter. Further research is, therefore, required.

197. Fajin's Idea of Buddhism

Takeshi NISHINO

Fajin 法進 (?-444) [a monk in the Northern Liang 北涼 (397-439)] took his life for the sake of starvelings in Turfan. This study is an investigation of the relationship between Fajin's action known as *ātmabhāva-parityāga* 捨身 and the Buddhism of the Northern Liang. By the way, this Buddhism developed through King Meng Xun's 蒙遜 (368-433/r. 401-433) devotion to Buddhism. In his reign, Fajin was given a warm reception by the king.

When the Northern Wei 北魏 (386-584) overpowered the Northern Liang in 439, the Northern Liang royal family led a retreat of some families to the west. Fajin was included, too. In 442 Wu Hui 無緯 (?-444/r. 443-444) occupied Turfan and established in the following year the Qoco 高昌 kingdom